

# 三恵ホームを辞して



廣田 茂 (前施設長)

# ホームの人たちとの交流

黒田 宏

緋いてみれば、十五年の風雪を刻む当園施設長(七代目)に不肖就任して、短い二年間でしたが、何の足跡も残さず去らせていただき恥ずかしい限りであります。

長いお付き合いを重ねてきたお年寄りとは、又、異なった障害を持たれる方々との温かいコミュニケーションの中で、幅広い福祉に接しさまざまな感銘を受けました。

思い出の悲喜交々をいつまでも眼に焼き付けこれからの余生の糧とし大切に保ち続けていきたいと念じております。

あゆみ会、デイ利用、家族会、園児、小中学生、OB会、ボランティア、そして地元、職員の皆さんに甘え放しで寛容を賜わりたいと存じます。

ペンを走らせているとお礼の言葉ばかりが先に立ち、ご厚情にひたすら感謝申し上げまするばかりであります。

障害福祉の環境も変革は厳しく施設、在宅ともに課題は渦巻いております。寸時も

停滞は許されず常に前向き姿勢で臨まなければ、流れに棹させず取り残されるのは必定であります。

どうか、職員の皆さんも一丸となって、これらの難関を乗り越え二十一世紀に向けて満足される運営と処遇に先ず「福祉の心」を旗印として、しっかりと胸に秘め、理解と協調を念頭に置きながら微笑を忘れず立派な施設づくりを展開されんことを期待してやみません。恰も時期的に新陳代謝に差し掛かっております。先輩のよき実績は余すことなく吸収し時代感覚をミックスして、励んでいただきたいと存じます。

ホームの発展と皆様方のご健勝、ご活躍を祈念し、変わりがませぬご交誼を切にお願ひ申し上げます。

毎日午前中友達とテニスを楽しみ、午後には気ままに、紙等を材料に手作りすること、これが私の退職後の生活でした。

この生活をふと振り返ると、確たる目的も計画性もなく、今まで人から恩恵を受ける半生であったことに思い当たりました。

私が今日まで、数多くの人々からいただいた恩恵を返すには、私の経験した知識と技術を生かせること、それがホームの人たちとの手作りであると確信したのです。

しかし、一緒に仕事をしてみて、私の思い上がりに気づきました。恩恵を返すどころか、ここでも多くのことを学ばせていただいているからです。機能回復訓練に取り組む態度や努力、握力の足りない手で精一杯取り組んでいる姿に、感動を覚え、わが身が励まされている現在です。

これからも、ホームの人たちとの交流を生きたいとして、頑張りたいたいと思います。

